

山古志錦鯉養鯉

長岡市山古志地域は、「生きた宝石」と呼ばれるほど美しい錦鯉の生産地として知られています。長岡地方の 150 軒以上ある養鯉場のうち、約 90 軒の商業用および趣味の養鯉場が山古志に拠点を置いています。最高水準の飼育と品質を提供する生産者から錦鯉を購入するために、毎年多くの人が山古志を訪れます。かつて、鯉は谷の急斜面にある水を張った棚田で飼育されており、現在も夏に一部の棚池で飼育されています。養鯉場の業者や鯉の生産者は、伝統的な棚田の景観の維持・保全に力を入れており、その景観はにこにこひろばや薬師の陵などから眺めることができます。初夏に色とりどりの夕日が田んぼと池の水面に反射する景色は、特に感動的です。

山古志の錦鯉養鯉の歴史

山古志の住民は、約 2 世紀前に錦鯉の養鯉を始めました。それまで、豪雪期には食料調達のために狩猟したり、移動したりすることが困難だったため、冬の食料として黒い真鯉の養鯉を始めたという歴史があります。春、真鯉の卵を水の張った田んぼに移動し、孵化した後は稲とともに成長していきます。鯉がある程度の大きさに達すると、専用の棚池に移動します。雪が降り始める前に、鯉は家から簡単にアクセスできる家庭用の池に移され、家族のタンパク源となりました。19 世紀初期に黒い鯉の中に混じって赤い模様のある鯉が見つかり、それを食する代わりに、よりカラフルな鯉を生産するためにその鯉を養鯉することになったと言われています。それ以来、科学的な研究と品種改良により、約 100 種類の異なる色彩の錦鯉が誕生しました。

山古志の錦鯉は、1914 年の東京大正博覧会により全国に知られるようになりました。1916 年に純系交配に取って代わって雑種交配が行われ、さらに多様な色模様が生み出されました。時が経つにつれ、山古志の錦鯉は海外のバイヤーや鯉愛好家の間で人気を博すようになり、山古志の養鯉場は錦鯉を世界に向けて販売した日本最初の業者の一つとなりました。2004 年の新潟県中越地震では、山古志に甚大な被害が発生し、鯉の池が荒廃し、住民が避難を余儀なくされました。生産者らはその逆境にもかかわらず、全国の飼育者や鯉愛好家の協力を得てわずか 3 年で再建に成功し、事業を復活させました。現在、山古志の錦鯉は世界中の池で珍重されています。販売シーズンには、自身の「生きた宝石」を選ぼうと世界中から買い手が集まり、山の村はにぎやかな市場となります。

錦鯉養鯉場の一年

繁殖期は 4 月から 5 月に始まり、希望の色模様の鯉の誕生が期待され、選ばれた錦鯉がつかいにされます。方法は生産者によって異なる場合がありますが、代表的な方法としては、鯉が産卵池の人工水草に卵を産みます。そして、他の稚魚と一緒に安全に孵化させるために、卵を別の池に移します。その後数か月間、それらの鯉は色模様、健康状態、そしてその他の基準に基づいて定期的に間引かれます。約 20 万匹の中から大人になれるのはわずか 500～1,000 匹です。

夏の間、養鯉場の労働者は、各鯉に適切な量の餌が与えられているか、虫や寄生虫が寄り付かない状態に保たれているか、また鯉を捕食する動物から守れるようになっているかを確認します。各養鯉場では、稚魚と成魚を大きさや体色のパターンによって区別するために複数の池が用意され、鯉の健全な成長のため、池を定期的に検査しています。

10 月と 11 月に、錦鯉は冬に向けて保護された温室の池に移動され、4 月まで室内で飼育されます。この時期は、購入希望者が鯉を選びに訪れます。また、生産者が錦鯉のベストな個体を展示会やコンテストに出品します。購入された鯉の輸送には、落ち着かせておくために冷たい酸素水の袋が入った、特別な箱を利用します。春が来ると、残った鯉は屋外の池に放たれ成長を続け、新しい世代の錦鯉の産卵サイクルが再び始まります。